

土壌診断「手合わせ」精度向上

J Aや肥料メーカーなど

で組織する土壌診断分析研究会は10日、東京都世田谷区で研究会を開いた。同じ土壌を各機関が分析したデータを持ち寄る「手合わせ分析」という方法で診断法を検討するのが特徴で、今回は7回目。24機関が参加し、水素イオン濃度(pH)の分析値では、ほぼ同じ結果だった。他の項目も過去6回に比べばらつきが少なく、技術の向上を確認

した。

青森県十和田市のネギを栽培するハウスの黒ボク土を試料に提供。J Aを含む土壌分析機関が12項目を調べた。東京農業大学の後藤逸男名誉教授が分析値を解説し、pH、電気伝導度(EC)、石灰、苦土、カリなどの項目で「ばらつきは小さくなっている」と評価した。

事例を紹介した。福島県南会津市の「南郷トマト」では、土壌診断で非常に良好な結果が出たが、リン酸などがやや過剰だった。堆肥の投入量を減らし、緑肥に転換するなど土壌の改善を目指す。

J A静岡市は、トルコギキョウの土壌改良の事例を報告。pHが低かったため、土壌酸性改良資材「転炉石ラグ」を投入し、pHを7.7〜8.9

まで高めたことで、1期の出荷で立枯病による出荷ロスがなくなったという。